

## 「イースター、おめでとう」

2020年04月13日

イースター おめでとうございます。今年のイースターは、新型コロナウイルスに翻弄させられる中で迎えた。世界で、死者数が10万人を超える深刻なパンデミックになった。旧約聖書時代から疫病により悲劇は起こったと記されているが、自分の身にこれほど身近に感じたのは、初めてである。感染しないように、また、感染させないようにと気を配る日々が続いている。科学、医療は進んだとは言え、自然の猛威には、人間は無力であると思知らされている。早い収束を祈るばかりである。

さて、主イエスは十字架の死から復活された。「主イエスは起こされ、生きておられる」という復活信仰が教会を形成し、キリスト教を生み出し、宗教的生命の源泉となった。この復活信仰は、どのような信仰であるのか。私の信仰を告白したい。

まず、主イエスは身体そのものが復活したという信仰がある。福音書には、肉をもって復活したと読み取れる記述が多々ある。これらの記述には、弟子たちの目の前に現れる場面と突然目に見えなくなる場面があり、身体のリアリティを持つものとしては受け止められない。最初に、復活について記述しているのはパウロで、彼は、紀元55年頃、Iコリント書15章で、「肉と血は神の国を受け継ぐことはできません。また、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐこともありません(15:50)」と書いている。朽ちる肉と血は神の国を受け継ぐことはできないと断言している。身体の復活という信仰は成り立たない。

次に、主イエスを十字架で失った弟子たちは失望、落胆したが、主イエスの愛に倣い、互いに愛し合う交わりを形成した。その時、彼らは「主イエスは起こされ、生きておられる」という実感を共有し合った。この実感を、主イエスの「復活」として受け止めた。70年頃に書かれたマルコ福音書は、復活した主イエスを描かず、天使が「あの方は、あなたがたより先にガリラヤ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」と告げたと記している。「ガリラヤでお目にかかれる」とは、初期のガリラヤ宣教の時に主イエスが現された愛と真実を、宣教し、追体験する中で、復活した主イエスに出会うことができるというメッセージである。主イエスの愛に倣うところで復活した主イエスに出会うというこの理解は受け止め易いが、実は復活した主イエスが人々を愛に生かすのではないのか。

パウロは、Iコリント書15章で、復活した主イエスはどのような体なのかという問いに対し、下記のように答えている。「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します。自然の体があるのですから、霊の体もあるのです。」復活した体は「霊の体」で、ギリシア語では「体」は「ソーマ」で、肉「サルキコス」ではないと言う。「霊の体」とは何か。これは、信仰において、認識できるものである。信仰における認識は、実際に見聞きし、手で触れられるものよりリアリティのある実態である。パウロはダマスコ途上で、復活した主イエスの霊の体に出会った。その時、神の全支配の中に呼び込まれた。それが、パウロの回心であった。この事実が、パウロを新しく生まれ変えさせたのである。

「霊の体」の主イエスが、人に臨み、人は信じる者にさせられる。そこに、神の命に満たされ、「新しい人(エフェソ2:15)」に造り変えられる奇跡が起こる。これを信じるのが復活信仰である。私の小さな人生において、この奇跡に与り、生かされてきた。だから「主イエスは起こされ、生きておられる」と告白するのである。